

---

# クピドさん

天月黎璽

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

クピードさん

### 【著者名】

天月黎璽

### 【あらすじ】

「クピードさん」は一度だけ「恋愛」に関する願い事を叶えてくれる。「クピードさん」は新たな出会いをくれたり、恋を実らせてくれる。でも、「クピードさん」はもう一人いて…

## 「クレドさん」からの「トバ

いろんな人を見てきた。  
たくさんの人を見てきた。

いろんな人が自分に救いを求めてきた。  
たくさんの人自分が自分に救いを求めてきた。

心に巣食う「負の感情」

それは人の子であるなら誰もが持つもの。

いろんな人がそれと戦つてきた。  
たくさんの人人がそれと戦つてきた。

いろんな人がそれを振り払おうとしてきた。  
たくさんの人人がそれを振り払おうとしてきた。

勝てた人もいる。  
振り払えた人もいる。

でも、

そういつた人たちがいるように、

負けた人がいる。  
振り払えなかつた人がいる。

もう、

自分ではどうする事もできず。

卑屈になつて叫ぶ事しかできない人がいる。

唯々、身体を震わせ、蹲る事しかできない人がいる。

空に向かつて声にならない叫びを上げる事しかできない人がいる。

それすらできない人がいる。

でも、

誰にだつて「幸せになる権利」は有る。

君にも。僕にも。

お前にも。俺にも。

貴方にも。私にも。

たとえそれが蜃氣楼の様であつたとしても。  
たとえそれが鏡像のようであつたとしても。  
たとえそれが積み上げた落葉の様であつたとしても。  
たとえそれが流れ星の様であつたとしても。

人はたつた一つの「幸せ」を手に入れたいと願う。

そうゆつ生き物だから。

できる事は限られているけれど、

自分の力で「幸せ」になれるというのなら。

「僕」は。

此處ニ居ル。  
「私」俺  
は。は。

## オモイ ネガイ セツナサ

人を「好き」になるのは簡単だ。

でも、

人を「愛する」のは難しい。

なぜなら、

「好き」は自分を優先した感情であるのに對し、

「愛」は相手を優先した感情だからである。

他者を愛するといつ事は、他者の立場になつて考えるといつ事である。

そして、

自分を愛せない者は、他者を愛せない。

あの日、初めて会つたときから、この想いは口を追う「」と強く、また強くなつていき。

そして、私は彼の事を想つては、切なを慕らせてゆく。

あの人は、こんな私の気持ちには気付いていないだろう。あの人は今日も、また、皆と同じ様に私と接し、皆と同じ様に私を見ている。

「嫌」

皆と同じなんて、「嫌」。私だけは彼の「特別」になりたい。私だけは彼の「特別」で在りたい。あの子が彼にとつて「皆と同じ」でも、私だけは「皆と違つ」存在で在りたい。

彼が私にとつて「皆と違つ」、「特別」な存在で在る様に。

「おはよう、光一君。」「おはよう、橘花さん。」「もう、香でいいって、いつも言つてゐるのに。」「いや、何と無くそつちの方がいいかな、って」「…そつ、か…。」「…そつ、か…。」

私が彼を下の名前で呼ぶのは、彼に少しでも近付きたいからである。そして、彼にも私を下の名前で呼んでほしいと、いつも思つている。

私が俯いているのを見ると、彼は「どうした?」と声をかけてくれた。でも、これは「私だから」ではない。これは、彼が「皆に對して」みせる優しさである。

「私だけ」のものじゃない。

私は彼を少し見上げて、「うつん。大丈夫。何でもない。」と言つて、離れすぎず、かといって、近すぎない距離で、彼の隣を歩いた。

オモイ ネガイ セツナサ (後書き)

オソクナリマシタ

## ユサブル ユレル クレル

もうすぐ学校行事が行われる。その為、今週から休み時間や放課後は、執行部やその他係りの人達が作業をするようになつた。香もその一人である。そして光一もまた。

しかし、香と光一は担当する部が違う。それでいて、作業は同じ部屋、同じ場所である。もちろん、一つの部に一人という訳は無く、光一は別な生徒、別な女子と共に作業をするのである。

光一と一緒に作業をしている女子は光一に好意を、いや、それ以上の感情を寄せているらしく、度々、不必要に、不自然な程に光一に接近しては、笑顔をみせている。それが香には堪らなかつた。自分も何かと理由を付けては光一のもとへ行くのだが、度が過ぎれば他人が見た時不自然なのは間違いないし、なにより、その行為は光一といふ女子に対する自分の「嫉み」「僻み」である事を自分自身がよく知つていた。

それは香にとって、その女子が光一と只の係員同士としてのよりも親しくしている事以上に堪らない事であつた。

その時であつた。光一と女子の、二人の顔が近付いた。わざわざ、一枚のプリントを一人で覗き込み、同じ箇所を一人で作業していく。必然と二人の距離は縮まり、二人の頭が近付き、二人の顔が近付き、そして、二人の眼が近付いていつた。

「嫌！」

香は心の中で叫び声を上げた。だが、それで何が変わるという訳でない。依然二人はそのままだ。時々、互いの肩が、手が、髪が触れ合つてゐる。

「駄目！それ以上彼に近付かないで！」

「それ以上彼に触れないで！」

「…それ以上…」

二人の眼と眼が合つ。二人ははにかんだ。何時からだつたのだろう

か。二人の顔は赤らんでいた。

「それ以上、彼に貴女を刻まないでえつ……！」

香の目の前で、一人が笑い合いながら、楽しげに作業を進めてゆく。

「……ここに居たくない……。」

「……胸が……こんなにも胸が苦しいよおつ……！」

香の右手は制服の胸元をしつかと握り締め、左手は床を強く引搔いた。

## ユサブル ユレル クレル（後書き）

「眼」には「まなざし」という意味もあるんですよ。物語中のシンに合つたものとして「目」ではなく「眼」を使用しました。ちょっとした自分なりの工夫です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5026d/>

---

クピドさん

2010年10月9日04時28分発行